

端野の寺院と教会・神社(その4)

○川向八幡神社

川向八幡神社は、明治四二(一九〇九)年一月、旧川向三班一三戸の方々が東一二号南六号線の丘(現在は民間の方が所有)に八幡神を祭神として小さな祠を建立し、これを八幡神社と称しました。

川向八幡神社の建立について「川向八幡神社縁起史」に、「第一に、神社を中心として部落の結東化という重要な意味がうかがえる。第二に、この地を我が土地、我が骨を埋める土地として本腰を入れ開拓に精を出すことの意味が込められている。第三に、原始生活者にとって人事をつくし、天明を待つという悟りではなく、祈るほか方法がなく、神社に祈ることにより、明日の希望を持ち心の大きな支えになった事と思われる」と記されています。

八幡信仰は、国の守護神、農耕神、仏教守護神、航海神、戦勝の神といわれています。なぜ、八幡神を祭神としたのかについては、不明とのことである。

大正四(一九一五)年、東一一号南五線に奉遷し、大正八(一九一九)年に地区の中心地である現在地に、長谷川鶴次郎、水口佐吉両氏から境内地の寄進を受け奉遷しました。また、同一五(一九二六)年に拝殿を新築しました。

その後、数回の補修が行われ、建立九〇周年を迎えた平成一〇(一九九八)年、全面改修し、同二〇〇四(二〇〇四)年に、「川向八幡神社」の社名額の寄付があり、同二〇〇八(二〇〇八)年に川向八幡神社建立一〇〇年記念式典が行われ現在に至っています。

なお、年中行事として、春秋の例祭に神職を招き、祭祀行事を行うほか歳旦祭も行われています。



川向八幡神社

○協和神社

大正元(一九一二)年、協和地区で柏の樹皮からタンニンが取れるため、柏の皮むきが盛んに行われ、この皮むき作業に従事した方々が事業主と共に作業の安全を祈願し、現在の協和文化センター付近にあった柏の太木のもとに、山の神を祀る小さな祠を建てました。これが協和神社の前身と言われています。

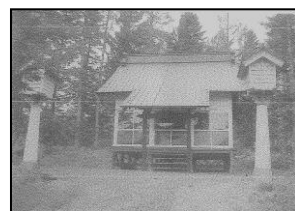
協和地区が川向第二部として部落が成立した翌年の大正七(一九一八)年、地区の中心地で見晴らしの良い現在地に祠を移し、昭和九(一九三四)年、地区の方々の寄付を以て社殿を建立し、以来、協和神社として地区全戸が氏子として護持してきました。

この頃、参道の両側に桜が植樹され、これが現在、桜の名所として町民の方々に親しまれている一帯の始まりです。

昭和三八(一九六三)年に鳥居を改修建立し、同五〇(一九七五)年には、協和開基七〇周年記念事業として拝殿の改修、平成一七(二〇〇五)年には、協和開基一〇〇年記念事業として屋根の一部を改修し、現在に至っています。

また、祭神は応神天皇として八幡神社と称したと永く伝えられてきましたが、他の説もあったことから平成一七(二〇〇五)年七月、改めて調査した結果、天照皇大神と応神天皇の二柱が祀られていることがわかりました。

なお、年間の祭事としては、春、秋の祭祀、歳旦祭等が行われています。



協和神社

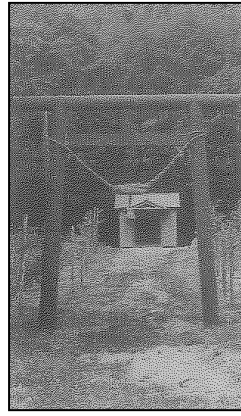
○忠志神社

明治四四(一九一一)年、愛媛団体が旧忠志小学校付近一帯に入地し開拓が始まり、開拓が一段落した大正一四(一九二五)年秋、北見農場から寄付された土地(小半分教場敷地の一角)に地区の方々の寄付により、神殿が建立されました。

翌一五(一九二六)年六月、伊勢神宮から天照皇大神の御身分を奉載し、六月一五日に盛大な落慶鎮座祭が行われました。以来、氏子の方々によ

戦後の昭和二五（一九五〇）年、GHQ（連合軍総司令部）の指令により、学校敷地内での神仏奉祀が禁止されましたので、神殿を忠志橋のたもとに移設しましたが、人家から離れ境内地として不適切なため、同五一（一九七六）年、再び旧学校敷地（忠志小学校は昭和四八年三月端野小学校と統合し廃校となった）に移設し、現在に至っています。

年中祭事としては、春、秋の例祭、歳旦祭が行われています。



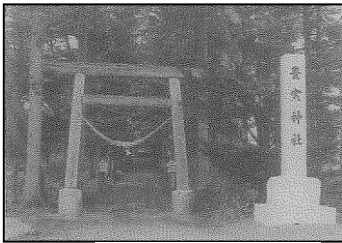
忠志神社

○豊実神社

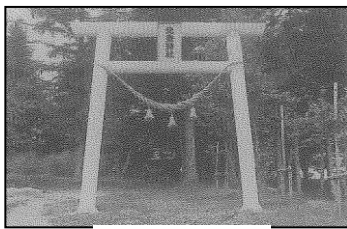
キトタウンシナイ原野（豊実一班地区）に開拓者が入植して間もない明治四四（一九一一）年、大工職の目黒定治氏が自宅裏の丘に小さな祠を建て、大黒様を祀ったのが豊実神社の前身とされています。

四月一〇日、一〇月一〇日を例祭日と定め近隣の方々と護国豊穰、家内安全を祈願する習わしであったと言われています。

大正一〇（一九二一）年四月一日、野付牛町から端野村が分村独立し、この地が端野村下仁頃第一区として部落が形成されたことを契機に、当地区の鎮守の神として、天照皇大神を奉祀することとし、河合房次郎氏から境内地三反歩の寄進を受け、貴登多牛神社を創建しました。



豊実神社



北登神社

以来、昭和一三（一九三八）年四月一日から施行された字名改正により「北実神社」となり、昭和二九（一九五四）年七月一日再びの字名改正により「豊実神社」となり、地区全戸が氏子として護持し、現在に至っています。

なお、神殿建立七十年を迎えた平成二（一九九〇）年社殿の大改修を行いました。その原型は建立当時と変わっていません。

年中祭事としては、春、秋の例祭、歳旦祭が行われています。

また、この地に宮城県から入植した門間明氏が郷土で身につけた「山伏神楽」を地区の方々に手ほどきし、昭和五年頃から昭和二五年頃まで、春、秋の例祭に山伏神楽の奉納舞をしていましたが、第二次大戦により休止されました。

しかし、昭和四七（一九七二）年、育ての親・門間氏を迎え、「豊実神楽」として継承していくために「豊実神楽保存会」を結成し、本格的な活動を始めました。

以来、神楽発祥の地、宮城県丸森町の方々と交流が始まり、端野町開基百年を迎えた平成八（一九九六）年一月三日、丸森町と端野町が「姉妹都市」となり、今日に至っています。

○北登神社

北登地区の開拓も進み、ようやく生活も安定に向かってきた大正の初め、地区の方々の総意により、氏神を祀ることとなり、集落の中心地にある岸山増次郎氏の土地約一・五反歩の提供を受け、ここに祠を建て登位加神社と称したのが北登神社の創建と言われています。

この祠は、床高の三尺四方の神殿であったと伝えられています。

昭和一五（一九四〇）年、紀元二千六百年を記念し、旧社殿跡に新しい北登神社神殿を建立しました。（前年に竣工したとも言われています）

以来、昭和三〇年代初めまで、春、秋の例祭には端野神社宮司を招いて例祭を行ってききましたが、その後は、春、秋の祭事や歳旦祭は氏子の方々により行われ、今日に至っています。

なお、昭和五六（一九八一）年七月、神殿に高さ三尺ほどのコンクリート台座を築き高欄を設けるなど大改修をし、平成五（一九九三）年六月、鳥居を新設しました。

参考文献

新端野町史（平成十年十月十日発行、端野町）

川向百年史（平成十七年十一月二十七日発行、川向ふるさと百年記念事業協賛会）

川向八幡神社 縁起史（平成十年発行、川向八幡神社改修委員）

協和史（平成十七年十二月十一日発行、協和開基百年記念事業協賛会）

協和史